

専従者の皆様へ

平成22年8月7日

お知らせ

世界救世教いづのめ教団
伝道史編纂委員会 山岡 邦安
共同プロジェクト推進委員会 葛原 精一
共同プロジェクト推進委員会事務局 井上 昌明
管理部管理課安野 哲司

1 平成22年7月29日の強制捜査について

皆様ご承知のとおり、平成22年7月29日午後3時頃から午後7時頃までの約4時間にわたり、警察により世界救世教いづのめ教団代表役員渡邊哲男氏の背任容疑で、いづのめ教団本部事務所に対して強制捜査がなされました。このことは、誠に重大な事実でありますので、私たちは、教団の将来を誤らせないために、私たちが知り得た事実を専従者の皆様にお知らせすることといたしました。

渡邊氏についてはこれまでも「週刊文春」（平成18年11月16日号）や「週刊新潮」（平成21年10月22号）で、金銭疑惑・社会的スキャンダル等が報じられており、専従者や信者からも真相究明の声が上がっておりました。しかし、これまで真相の解明がなされることはなく、教団運営は不透明なまま現在に至り、専従者・信者からの信頼は失墜する一途を辿っております。

私達はこれを機に教団がこれから透明かつ公明正大なものとなることを心より願うものであります。

以下には、渡邊氏の背任容疑の一つについて、我々の知り得たことをご説明いたします。

2 渡邊氏の背任容疑およびその背景について

渡邊氏はこれまで、心ある専従者等から上がっていた「教団の構造改革」の要望をことごとく妨害し、杜撰かつ横暴に自らの権力を行使しうるワンマン体制を築き上げました。渡邊氏のワンマン体制が構築された現在の教団では、上納の激減、入信者の激減、参拝者の激減、専従者の御用意欲の低下等の多くの問題を抱えています。それにもかかわらず、渡邊氏を中心とする教団執行部はこれら多くの問題の解決への取り組みを一切行ってきませんでした。

渡邊氏は、上記ワンマン体制を利用し、これまで数々の疑惑ある行為を行ってきました。

渡邊氏の疑惑が週刊誌やマスコミに取り上げられたのは皆様ご承知のとおりであり、教団はカルトだとの指摘まで受けてきました。しかし、当の渡邊氏および教団執行部は、これまで専従者や信徒に対して、一切説明を行っておりません。

そして、私達は上記渡邊氏の数々の疑惑の一つとして、山本成希氏（元責任役員）の不祥事にまつわる背任の事実を知らされました。

すなわち、山本氏については生前に、教団の公金に対し、領収証を偽造し経費を不正に請求するという事実が発覚しておりました。本来なら、このような公金の不正取得は懲戒解雇となるべき行為であります。しかし、渡邊氏は自らの保身を図る目的の下、山本氏に対する懲戒を行わず、逆に、山本氏が急死した際には、今までにない多額の浄財を退職金等として遺族に支給したのであります。公金の不正取得を犯した山本氏を自らの保身の目的で懲戒にもせず、逆に自らの保身に利用し、さらには、懲戒対象者に対し、多額の金銭を遺族に支給したのであります。

渡邊氏が上記背任を行ったのは以下の理由によると考えられます。

渡邊氏は、当時、責任役員の任期満了・定年による退任を控えており、中川憲治氏との間で定年を迎えた際には、昭和58年暮れに始まった先の教団紛争の責任を取るため一緒に退任することを約束していました。しかし、自らが退任すれば、数々の疑惑が明るみに出ることをおそれ、自らの保身のため、中川氏との約束を反故にするために、中川氏を排除する必要があったのです。そのため渡邊氏は山本氏をそそのかし、そそのかされた山本氏は30年来の恩師であった中川氏を反教主呼ばわりし、中川氏のみを不当に失脚させたのです。そそのかしたことについては明白な証拠があると聞いています。

こうした渡邊氏の背任容疑等が一つ一つ明らかにされることが教団再生の第一歩であります。

3 私たちの願い—今後についての呼びかけ

私たちの願いは、あくまでも、世界救世教いづのめ教団の健全な発展であります。そのためには、現在の数々の疑惑をすべて解明し、不透明な教団運営を徹底的に改善し、透明で信頼のできる教団を作っていかなければなりません。この目的を達成するためには、すべての疑惑を闇に葬り去ろうとしている渡邊氏に退任してもらい、教団を清廉潔白に運営する執行部を再構築する必要があります。そして、教主様の判断を誤らせることなく私たちの声をきちんと正確に届けてくれる執行部である必要があります。’

私たちは、社会や信徒の幸福を心から願い、明主様のみ救いを展開できる教団をつくり、一人一人が明主様への信仰を求めて一層の自己改革に努め、明るく楽しく。喜びと希望を持って御用のできる教団作りに共に取り組んでいきたいと願っています。

これからは専従者一人ひとりが明主様に真向かい、自らが決断し、自らの足で立ち上がっ

て行かねばなりません。そしてその輪を広げ、お互いに助け合いながら、教団改革を推し進めたいと願っています。一人でも多くの専従者・職員の皆様の奮起を期待しております。

以上